



▲民家に飛び込んだ堤防 (菜生海岸) (提供：高知県)

### 背景

平成16年(2004)10月20日、台風23号の激しい高波により、室戸市の<sup>なまへ</sup>菜生海岸では堤防が約30mにわたって決壊しました。越波等により背後の家屋13戸が被災し、3名の方が亡くなるという惨事になりました。堤防を乗り越えた水塊が背後の家屋等を被災させるとともに、堤防の決壊や流失が被害を拡大しました。この堤防の被災は、これまでの海岸災害では見られないものでした。この話は、異常な高波により被害を受けた町内会長さんの証言です。

### アクセス 菜生海岸

- 室戸市役所より南東へ直線距離約6km
- 室戸市室戸岬町
- 緯度経度 北緯33度16分24秒, 東経134度09分31秒



平成一六年(二〇〇四)の台風二三号の高波は、室戸市の海岸堤防を破壊し、三名の命を奪いました。当時の町内会長さんは以下のように証言しています。

あの日は午後一時頃から電話や電気が通じず、とにかく大変な雨と風でした。でも我々室戸市民は台風慣れていましたから軽く見ていたのです。おそらく皆、無防備だったのではないのでしょうか。ですから、あの広くて大きな堤防が吹っ飛んだのを見た時は「まさかこんなことが」という気持ちでした。私はずっと室戸に住んでいます、あんな光景を見たのは初めてです。

被害のあった家へ救助に行ってみると、堤防の塊が家具もろとも家を押しつぶし、畳が天井に突き刺さっていて、波が山手側の壁までぶち抜いていました。それを見て以来、心構えが変わり、自主防災組織を作るきっかけになりました。

海沿いに住む我々は、自分で自分を守っていくしかありません。台風の怖さを忘れないためにも、高浜地区では一〇月二〇日を地区の防災の日として、防災訓練を実施しようと考えています。



▲平成10年の浸水状況 (土佐山田町神母ノ木)  
 (『98高知水害の記録 豪雨パニック』より引用)

## 背景

平成10年(1998)9月23日秋雨前線により降り出した雨は、四国地方の各地に1,000mmにも達する雨量をもたらしました。高知市では24日6時からの日雨量が943mmにも達し、市内各地で家屋の浸水が発生しました。この時、香美市土佐山田町では片地川の堤防が決壊し、近くに住む体の不自由な高齢女性が溺死するという痛ましい出来事が起こりました。

## アクセス

### 山田堰跡 (物部川)

- JR土佐山田駅より東北東へ直線距離約3km
- 香美市土佐山田町
- 緯度経度 北緯33度36分44秒, 東経133度42分48秒



平成一〇年(一九九八)の高知水害では、時間雨量が百ミリを超えるような豪雨が降りました。老夫婦は二人暮らしでした。妻は五年半前、脳梗塞のうこうそくで倒れてからは体が不自由で、人に支えてもらって立つのがやっとでした。そこに突然の豪雨により、片地川の堤防が決壊し、濁流が一带の民家に流れ込みました。一階のベッドで寝ていた夫が浸水に気付いたのは午前二時頃でした。ベッドから下りてみると水がすねの辺りをぬらしていました。

「これはいかん」隣で寝ていた妻を立ち上げさせました。二人は二階を目指しました。その間水は容赦なく押し寄せ、夫の首まで達しました。もう、前に進むことはできませんでした。

妻の頭が水につからないように夫は抱えました。「冷やい、冷やい」と繰り返す妻の足を、浮いた畳の上へ上げてやりたいと思いましたが、頭を支えるだけで精いっぱいでした。

「もう限界じゃきね」「お別れぞね」妻は夫の腕の中で息を引き取りました。夫は妻の体の重みをその手で受け止めました。それからどのくらいの間がたったことでしょうか。空が明るくなった午前六時半過ぎ、夫は救助されました。





▲昭和47年の繁藤災害 (提供: 共同通信社)

## 背景

昭和47年(1972)7月4日午後から高知県中部の山間部では断続的に強い雨となりました。このため、香美市繁藤では、1時間に95mmの豪雨を記録するなどして、5日9時までの日雨量は742mmに達しました。この大雨により、繁藤では土砂崩れが相次ぎ、ついには高さ約100m、幅約200mの大規模な山崩れが発生し、死者・行方不明者60名を出す大惨事となりました。この土砂災害では、住民の救出活動をしていた消防団員が二次災害に巻き込まれました。この後、消防の補償制度をつくるきっかけとなりました。

## アクセス 繁藤災害の慰霊塔

- JR繁藤駅より北東へ直線距離約200m
- 香美市土佐山田町繁藤
- 緯度経度 北緯33度40分56秒, 東経133度41分37秒



繁藤は、豪雨が集中して降るため、古くから「雨坪」と呼ばれてきました。その雨坪で土砂災害が起こったのは昭和四七年(一九七二)七月五日のことでした。

午前六時、国鉄(現在のJR)繁藤駅前の人家の裏山がくずれました。その家で消防団員が避難作業を手伝っていた時に、再び山崩れが起こり、消防団員が生き埋めとなりました。山崩れが繰り返して起こることが心配される中、懸命の救出活動が続けられました。やっと生き埋めの消防団員の着衣が見え、ショベルカーを退避させ、手作業に移ろうとしていた矢先のことです。

午前十一時前に予想もなかった大山崩れが発生し、一瞬にして一〇万立方メートルの土砂が駅前付近を襲いました。この大災害により、一二軒の人家、停車中の列車、消防団の救出活動に駆けつけていた人々などが押し流され、死者・行方不明者は六〇人となりました。

消防団、県警、陸上自衛隊、国鉄、建設業者、医療班などが総力をあげて土砂の除去作業を行い、行方不明者の捜索を行いました。雨のため難航しました。捜索活動はその後九月下旬まで続けられましたが、全員を発見することはできませんでした。

最後の遺体が発見されたのは、半年後の翌年二月のことでした。下流の護岸工事中に発見されました。災害現場近くには遭難者のための慰霊塔が建てられています。



## 背景

平成16年(2004)の台風15号は、8月18日から19日にかけて東シナ海から日本海に抜けていきました。台風15号は南北に雨雲が広がったのが特徴で、四国に南から湿った空気が多量に流れ込んだため、吉野川上流域に多量の雨を降らせました。高知県大川村の小松では、8月17日の16時からの2時間に205mmの強い雨を観測するなど、3日間で総雨量1,000mm以上の記録的な豪雨を観測しました。

## アクセス 小松団地

- 大川村役場のすぐ上
- 大川村小松
- 緯度経度 北緯33度47分02秒, 東経133度27分59秒



四国の山あいには、お互いに助け合う「結いの文化」が残っています。大川村では、この助け合いの文化が平成一六年(二〇〇四)の台風による被害を未然に防ぎました。

村役場近くの高台にある小松地区に住む主婦が異変に気づいたのは、土砂降りが続いていた一七日午後四時前頃でした。裏山からのどす黒い濁流がコンクリート張りの水路からあふれ返り、玄関先まで迫ってくる勢いでした。生まれて初めてかいた、鼻にぐつとくる嫌なにおいが家まで入って来ました。

すぐに村役場と連絡を取り合って、避難の呼び掛けを確認しました。降りしきる雨の中、この主婦は裏山に最も近い八軒のドアを次々にたたき、「上の山が大変なことになっちゅう。すぐに役場の車が来るき準備して」と大急ぎで知らせて回りました。

この後、村の避難指示も出され、住民は着の身着のまま、バスで近くの大川中学校へ避難しました。呼びかけた主婦も車で二往復し、近所の人たちの避難に協力しました。おかげで小松地区は床下浸水の被害は出たものの、避難した二六世帯、四八人には一人のけが人も出さずに済みました。

一人暮らしのお年寄り「足が悪くてとても一人では逃げられないし、みんなに迷惑かけずに済むよう、早め早めに言うてもうて、本当にありがたいことです」と主婦の機転に感謝していました。

小さな村には、自助、共助の意識が脈々と受け継がれています。「結いの文化」が被害を未然に防ぐ上で大切な役割を果たしていることを物語っています。



平成10年9月25日の浸水状況▲▶



## 背景

高知はかつて「河内<sup>こうち</sup>」と標記されていたそうです。昔から度々水害に見舞われ、人々は水害との闘いを続けてきました。平成10年（1998）9月の秋雨前線により、高知市では24日6時からの日雨量が943mmに達し、市内各所で家屋が浸水しました。高知は激しい雨と河川の越流で「河内」になってしまいました。この話は、平成10年高知水害を体験した障害者の方の体験談をもとにしたものです。

## アクセス 高知平野を一望できる五台山

- JR高知駅より南東へ直線距離約4 km
- 高知市吸江
- 緯度経度 北緯33度32分53秒，東経133度34分23秒



傘を突き抜けると思うほど猛烈な雨、時間雨量一二九・五ミリが降った平成一〇年（一九九八）高知水害。この話は、平成一〇年（一九九八）の高知水害を体験した障害者の方の体験談をもとにしたものです。「裏山からは石がゴロゴロ崩れ始め、もう私たちは覚悟を決めました」と話すのは高知に住むAさんです。Aさんの夫は約一〇年前、脳卒中で倒れ、自宅で寝たきりの生活でした。水害時、地域には避難勧告が出され、近所の人も何度か「早く避難して下さい」といって戸を叩きに來たと言います。しかし、「こんな豪雨の中、避難なんてできやせん」と言って断りました。「裏山が崩れ、この家が押し潰されたら二人でここで死のう」と覚悟を決めたそうです。

在宅寝たきり障害者の方の中には、避難勧告が出された時、地域の人の介助で避難所までたどり着くことができた人もいます。しかし、トイレのこと、自分で姿勢を保つことなどが自由にできないBさんは、避難所に居ることもできず、幸いに市役所の仲介で病院に入院することができようやく落ち着いたといいます。一方、すみやかに特別養護老人ホームへ臨時入所させてもらいホッとしたCさんもいました。



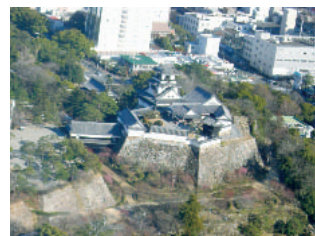


## 背景

昭和51年（1976）9月、台風17号の停滞とその後6日間降り続いた雨により、高知市では降り始めからの総降雨量が1,306mmという記録的な豪雨となりました。市内を流れる鏡川、神田川、久万川などの川が氾濫し、市内のほとんどが水没しました。このため、高知市長は「非常事態宣言」を発表し、「自分の命は自分で守ってほしい」という報道がなされました。災害時には行政が対応できない事態が想定されます。その時には、自分の身は自分で守ることの重要性を伝えています。

## アクセス 非常事態が宣言された高知市(高知城)

- JR高知駅より南西へ直線距離約1.5km
- 高知市丸ノ内
- 緯度経度 北緯33度33分39秒，東経133度31分53秒



昭和五十一年（一九七六）、高知市を台風一七号が襲った高知水害の時のことです。住んでいる地区が海拔ゼロメートル地帯であるため、私は、台風に備えて家具を二階に上げるかどうか判断しようと、夕刻、玄関先に出ました。深さが二メートル近くある側溝の水位が、見る間に玄関まで上がってきました。慌てて家具や電化製品を二階に上げ、畳を外し終わったところで、床板が浮き始めました。二階にいれば大丈夫と、落ち着きを取り戻していた矢先、テレビから高知市長の「非常事態宣言」が流れ、「鏡川の堤防が決壊したので、二階も危ないから各自逃げよ」と報じられました。「非常事態宣言」には見捨てられた思いが強く、かなりショックでした。反面、生き抜くためには自力で自分を守るしかないと思いつた瞬間でもありました。すでに玄関前の水位は腰のあたりまでできていました。暗闇の中、腰まで水に浸かりながら、避難場所へと向かいました。道は濁水で見えず、日々の記憶を頼りに、勘で進むしかありませんでした。また、周辺の深い側溝には各家の出入り口にコンクリートの蓋ふたがさされているだけだったので、落ちたら最後という恐怖感が募り、一歩ずつ、つま先で確認しながらの避難でした。避難場所まで時間にして二〇〜三〇分ぐらいの時間でしたが、ものすごく長く感じました。



小さい谷や高い土地でも油断せず土砂災害の前兆があれば  
早めに避難すること



## 背景

昭和50年（1975）8月17日、台風5号は宿毛市付近に上陸し、その後伊予灘を経て、山口県から日本海に抜けました。この台風が通過した17日には高知県中部の山間部では豪雨となり、17時までの1時間にいの町で93mmを観測しました。このため、仁淀川は大洪水となり、山崩れや土石流も発生して大災害となりました。この話は、洪水時に土石流に遭遇した人の体験談です。

## アクセス 災害の発生したいの町

- いの町役場
- いの町1700-1
- 緯度経度 北緯33度32分53秒，東経133度25分41秒

この話は、昭和五〇年（一九七五）に土石流に遭遇した人の体験談です。

八月一七日の午後、裏の加茂山から土石流が発生し、自宅を鉄砲水が襲いました。わが家は山の裾野すそのの比較的高い位置にありましたが、この鉄砲水により床上二〇センチメートル程度浸水しました。この時、くみ取り式の便所から異常な臭気がして、またプロパンガスのボンベが家に当たる音がした後、突然家の中に大量の水が入ってきました。この水の勢いは激しく、あっという間に一階が浸水し、母親と妹と急いで二階へと避難しました。あまりに突然の出来事に、当時小学校三年でしたが、言いようもない不安と恐怖を感じたことを今でも覚えています。

二階に避難してからも雨は激しく降り続き、階段に上がってくる水かさがだんだん増してきたことから、近くの小学校へ避難することになりました。しかし、時既に遅く、小学校へ向かう町道には濁流が流れ、横断することができなくなっていたので、やむを得ず、近くにあった四階建てのビルに避難することになりました。そこには近所の人も避難してきており、多くの人が不安な夜を過ごしました。

次の日、自宅に戻ると、一階は泥で埋まっており、二階での不自由な生活を余儀なくされました。この土石流は家の裏の小さな谷筋で発生しており、裏の住宅地に水が溜まったことから、水を吐かすためブロック塀を壊したことでより水が流入してきたことが後になって分かりました。

この豪雨からは、早めに避難することと、土石流や鉄砲水などの突然の災害に備えることの大切さを学び、今も心に刻んでいます。

江戸



背景

高知県の波介川に関する史料によると、川底を「寸志夫」で掘るという記録が残されています。寸志夫とは、自発的に無償で仕事をすることです。今日で言うところの「ボランティア」です。藩政期の波介川では、川の水はけを良くするために、村人たちが自発的に川底を掘る作業を行っていました。その村人の熱意は藩を動かして、波介川の改修につながりました。

アクセス

波介川水門（波介川）

- 波介川は仁淀川大橋より南へ直線距離約500m
- 土佐市用石
- 緯度経度 北緯33度29分23秒，東経133度27分10秒



文政一一年（一八二八）、土佐市周辺は大洪水に見舞われました。村の人々は庄屋を中心に話し合い、波介川の水はけを良くして、洪水による被害を少なくするために、川底を掘る作業をすることにしました。藩からの命令ではなく、村人が自分たちの意志で自発的に作業に参加したので、「寸志夫」と呼ばれています。この時に村人が川底を掘ったのは、初田と出間の二ヶ所でした。これは、波介川の全長から言うと、ごく部分的なものでした。しかし、これ以降、村人は村を水から守るためには藩に頼るだけでなく、自分たちも応分の協力をしようというようになりました。

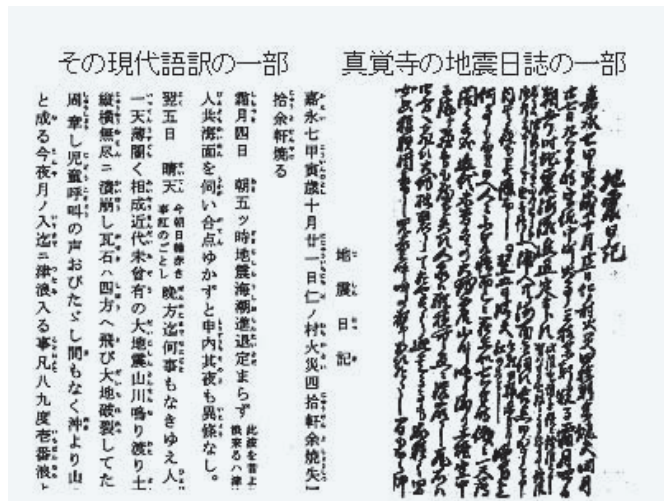
「寸志夫」を実行するために見事な組織が作られていました。村々に差配役が組頭級から選ばれて、銀、米、その他の調達をしました。責任者の庄屋は現地に詰めました。また、監督に来る郷廻の役人の接待から祈禱のための神官や僧侶の接待、さらに角力場の設置、角力取りの宿割りからはじまって警備まで行き届いていました。経費については、地主、富裕層が負担していました。

封建社会の中で人々は忍苦を強いられながらも自覚を高めていたのです。このような村人の熱意が藩に届かないはずはありません。その後、藩による波介川の改修工事につながるようになりました。





江戸



▲真覚寺日記解説書



宇佐湾を望む真覚寺▶

## 背景

高知県の真覚寺には、「地震日記」九巻と「晴雨日記」五巻からなる「真覚寺日記」が保存されています。これは、当時の住職であった井上静照師が、安政東海地震が起こった嘉永7年（1854）11月4日から慶応四年（1868）までの15年間にわたって記した日記です。ここでは、嘉永7年11月5日に起こった安政南海地震に関する記述を現代語訳にして概要を示しています。

## アクセス 真覚寺

- 宇佐漁港より東北東へ直線距離約200m
- 土佐市宇佐町宇佐
- 緯度経度 北緯33度27分10秒，東経133度27分13秒



嘉永七年（安政元年・一八五四）十一月四日の安政東海地震発生翌日、五日の安政南海地震の土佐市宇佐町の様子が真覚寺の住職の日記に次の様に記されています。

翌五日晴天。今朝は太陽がまるで紅のように赤い。晩方まで何事ありませんでしたが、午後五時頃にわかに空が薄暗くなり、未曾有の大地震が山川に鳴り渡り、土煙が空中にまん延し、飛ぶ鳥も度を失いました。人家は縦横無尽に崩れ、瓦は四方に飛び、大地は破裂して容易に逃げることもできず、男女はただ狼狽し、子どもは泣き叫びました。

間もなく沖から山のような大波がやって来て、宇佐、福島一面が海となりました。今夜月の入りまでに津波がおおよそ九度押し寄せ、一番目の波から二番、三番の引き潮で浦中がみな流されました。総じて地震の時の潮は、進むときは緩やかで、引く時は急です。福島と中須賀の間は家が一軒も残らず、渭ノ浜の山際まで波が入っていききました。宇佐は流れ、残った家はわずかに六〇軒であり、このうち二〇数軒を除いては、家は残っているものの、修繕はできないほどになりました。

波が来た時に、諸道具を捨て置き山に逃げた人はみな命が助かり、金銀雑具に目をかけ油断した者はことごとく溺死しました。流死した人は福島で五〇余人、宇佐で一〇余人に及びました。



▲津波の洗礼を受けた宇佐湾

昔から大小何回かの津波の洗礼を受けてきた宇佐では、先人がその経験を通してつかみとった尊い教訓を残してくれています。安政の大地震の時の津波は、波頭が萩谷の入り口まで来たということから、その地に記念碑が建てられています。その碑文の中にこう記されています。

「昔宝永の変にも油断の者 夥敷おびただしく 流死の由、今度もその遺談を信じ取りあえず山手へ逃登る者、皆恙なく、衣食等調度し又は狼狽して船にのりなどせるは流死の数を免れず可哀哉」(昔、宝永地震の時に油断した者が溺死しました。今回の安政地震でも、昔の話を信じて山に逃げ登った者は無事でしたが、衣類、食料などを気にかけて逃げ遅れた者や慌てて船で逃げようとした者などは溺死しました。ああかわいそうな話です)

過去の体験から、津波の時にはまっしぐらに山へ逃げよという教えが宇佐では言い伝えられています。このことが、昭和地震でも活かされて、他の地域に比べて宇佐では死者が少なかったという結果につながっています。



### 背景

昭和21年(1946)の南海地震後の津波は、土佐市の宇佐地区に壊滅的な被害をもたらしました。津波の害を受けない者は一人もいないと言われるほど大きな被害でした。しかし、宇佐町の被害には、他の地域と比べて特色がありました。それは死者が少なかったということです。その理由は、津波を経験した昔の人たちが後世に尊い教訓を残してくれているからだと言われています。

### アクセス 安政地震の碑

- 宇佐漁港より西北西へ直線距離約1km
- 土佐市宇佐町宇佐萩谷地区
- 緯度経度 北緯33度27分20秒, 東経133度26分17秒





昭和南海地震の当時、土佐市宇佐町に住んでいた人の体験談に基づく話です。  
 とにかく凄い揺れでした。前の空き地へ一斉に飛び出しましたが、身動きが取れません。家族全員が身体を支え合って、必死に耐えて地震をやり過ごしました。やがて激しい揺れも治まり、私たちは家へ入りホッととしたのも束の間、下の弟が突然「直ぐに津波が来る。早く逃げんと大変なことになる!」と、私たちに避難を促しました。母も私も津波への危機意識は全くなく、「えっ、なんで?」と疑心暗鬼の状態でしたが、弟は委細構わず行李を持って来て、「早く、この中へ大事な物を入れて」と急かします。「お母ちゃん、何を入れようかね」母も私もたんすの前でただオロオロするばかりでした。「早よう家を出ないかん」必死の弟に急かされて、結局、着の身着のまま家を後にしました。  
 近くの山への避難は、弟の機転で私たちが一番でした。その後、近所の人たちも続々と避難して来ましたが、皆、大慌てで私たち同様、着の身着のままです。余程慌てたらしく、素足の人、左右の履物が違う人、と混乱していました。特に驚きましたのは、最後の最後に避難して来た人たちのズボンや着物、モンペの裾部分が一様に海水に濡れていました。聞くと「津波に追いかけられた」とのことでした。まさに間一髪のところ  
 で、津波の来襲から逃れた人たちでした。

昭和30年代以前

## 背景

昭和21年(1946)南海地震後に、逃げ遅れたため津波に襲われて亡くなった人が多数いましたが、地震後に「早く逃げんと大変なことになる」という弟の言葉に従ったために、津波被害を免れた家族もいました。高知市春野町の仁西郵便局では、昭和南海地震の体験を風化させまいと、地域の人々から体験談を聞いて、とりまとめています。この話は、当時21歳だった女性の証言をもとにしています。

## アクセス 震災復興記念碑

- 宇佐漁協前
- 土佐市宇佐町宇佐
- 緯度経度 北緯33度27分01秒, 東経133度26分33秒





## 背景

宝永4年(1707)10月4日、日本最大級の宝永地震が発生しました。津波が紀伊半島から九州までの太平洋沿岸などを襲い、死者は2万人に達したと言われています。この中で津波の被害は土佐が最大でした。須崎では八幡神社のみこしが津波に流され、太平洋を漂流して伊豆に流れ着きました。八幡神社の木札には、宝永津波やその後の様子やみこしが伊豆に流されたことなど、また、みこしが返還された時の送り状が記されています。

## アクセス 須崎八幡神社

- JR須崎駅より南西へ直線距離約1km
- 須崎市南古市町
- 緯度経度 北緯33度23分21秒, 東経133度17分10秒



宝永四年(一七〇七)一〇月四日の大地震による津波で、須崎の八幡宮は水深四メートル以上となり、社の大部分は水中に没し、倒壊しました。このため、神社のみこしが潮の流れに乗って太平洋を漂い、流れ流れて五日目の一〇月八日に伊豆の岩地に打ち上げられました。

土地の人が見つけ、遠く須崎八幡宮のものであることが分かりました。みこしは村人と神官が丁重に祭り、保管されていました。須崎八幡宮がこのことを知ったとしても、津波による大きな痛手を受けており、数百里も離れた伊豆までみこしを受け取りに行くことは困難だったことでしょう。

安田浦の回船業の長左衛門がこれを聞き、伊豆の岩地に廻船し、みこしを須崎にお返し願いたいと申し入れました。村人と相談した神官は、おみくじにより神意をお伺いしたところ、ご帰国したいお告げが出たそうです。

そこで、長左衛門は、別れを惜しむ村人や神官の了承を得て、船に積み込み、宝永五年六月四日に伊豆を出航し、鳥羽港(三重県)に着きました。鳥羽港で志和浦の回船業の弥一兵衛の船に積み替えられて、六月一五日に須崎八幡宮宛の送り状が添えられて、みこしは須崎に向けて出航しました。

みこしが須崎八幡宮に正式に受け入れ奉納されたのは、その年の九月一日のことでした。



「宝永津浪溺死之塚」には、後世の人が津波被害に遭わないように、以下のような内容が記されています。宝永津波の犠牲者の一五〇年忌を準備している最中に、安政南海地震が起きました。人々は宝永地震の津波のことを知っていたので、我先に山林に避難しました。このため、安政南海地震の時には昔のように津波の犠牲者を出さずに済みました。ただ、船で避難しようとして、津波で転覆して三〇余人が亡くなったことは痛ましいことです。

なぜ津波の時に船で避難しようとしたのかというと、昔からの言い伝えの中に、山に登ろうとして石に当たれて亡くなったという話や、沖に出た人が無事帰ってきたという話があり、それを間違って解釈したためです。津波が来る前に早く沖に出るのなら安全だったでしょうが、地震にあつた後に船出をすることは危険なことです。

地震が起きたら津波があると考え、油断してはいけません。しかし、地震が起きたらすぐに津波が来るというものではありません。(注：この記述は間違いであり、地震後すぐに津波が来ると考えるべきです。)少し間があるので、揺れの様子を見計らいながら、食べ物、衣類等の用意をして、石の落ちてこない高所を選んで逃げることです。その時も山の頂上まで登る必要はありません。今回の津波でも古市神母の辺りでは屋敷に水は入らなかったし、昔の津波でも伊勢が松で数人助かったと言われています。津波と言ってもそれほど高いものではありません。

一五〇年に二度も同じようなことが起こったのだから、考えないといけません。将来もこのようなことが起こると考えなくてははいけません。後世同じようなことに遭遇する人の心得になればと思います、みんなで議論してこの石碑を建て、そのことを記して下さい、と私はお願いしたのです。そこで私はおおよそのことをこの石碑に書き記したのです。



▲むかしから津波被害を受けてきた須崎湾

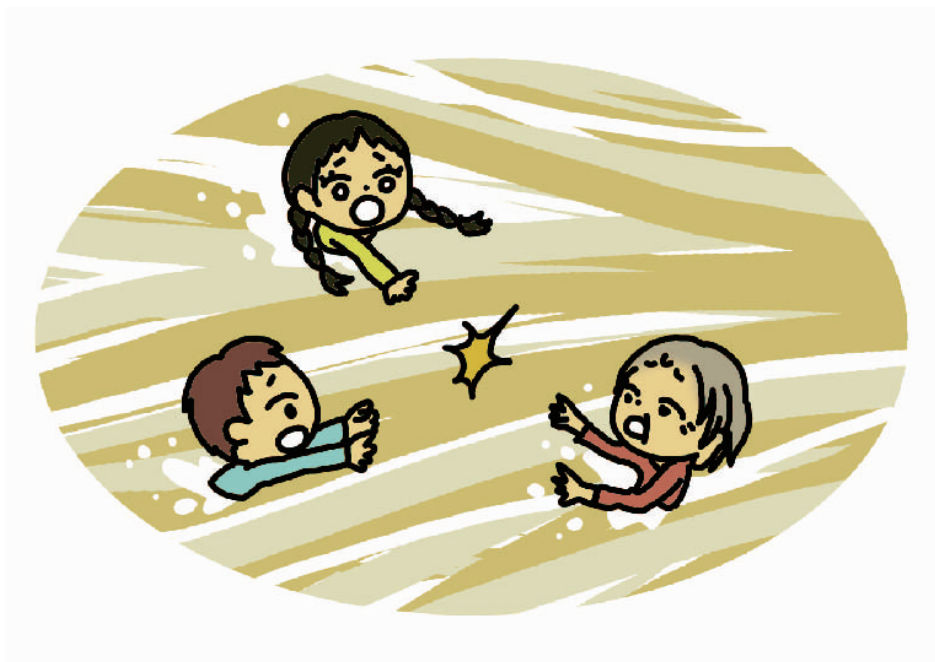
## 背景

須崎市に「宝永津浪溺死之塚」という石碑が建っています。安政南海地震の2年後の安政3年(1856)につくられたものです。宝永元年(1704)の宝永地震津波で亡くなった400人余の亡骸を改葬する際に、150年忌を記念して建立されたものです。作者の古屋尉助という人は、この石碑に地震津波に遭遇した時の心構え、教訓などを記しています。

## アクセス 宝永津浪溺死之塚

- JR須崎駅より西へ直線距離約1km (お馬神社すぐ南)
- 須崎市西糺町
- 緯度経度 北緯33度23分42秒, 東経133度17分03秒





## 背景

昭和21年（1946）12月21日午前4時過ぎ、南海地震が発生し、地震発生後10分ほどで須崎湾に津波が押し寄せたようです。その津波の速度は時速25kmにもなったと言われています。津波の到来に逃げ遅れた人々は流木などが流れる中を逃げまどい、須崎で40余名の犠牲者を出しました。この話は、地震後逃げるのが遅くなったため、子ども二人を老母に預けて先に逃げるようにしたところ、三人が津波に襲われ、辛うじて老母と弟は助かったものの、6歳の長女を亡くした父親の話です。

## アクセス 津波之碑（須崎橋）

- JR須崎駅より南へ約300m
- 須崎市新町
- 緯度経度 北緯33度23分27秒、東経133度17分37秒



昭和二十一年（一九四六）の南海地震を体験した人の話です。

歳もおし迫ったあの日、午前四時頃、まだあたりは暗い。震動はなかなか止まりません。寝ていた老人、子供を大声で起こしました。やがてどこかで「おーい津波ぞー。逃げよー」と叫ぶ声、今考えると貴い言葉でした。

私たちは寒さをしのぐため、まず衣服を探して身に着けていました。その間に、刻々時はたつていきました。子供二人を老母につけて、一足先に家を出し北に向け、城山公園へ逃げるようにしました。

私たちも時を移さず後を追いましたが、三〇メートル位北へ行っただけ、北の方からゴーゴーと大きな音をたてながら、津波らしい大波がやってきました。急流のような波は、膝から腰、腹、胸へと、どんどん深くなりました。これでは押し流されて溺れるかも知れないと方向をかえて西向けに、屋根へはい上がり、軒から軒へと伝い渡り、ようやく公園の登り口までたどり着きました。

「母と子供はどうなったか」と気が気ではありません。やがて、夜が明け、波も引き去り、山を下りました。幸いに母と長男は驚きと悲しみと寒さにふるえながらも帰っていました。三人は家を出た後、津波に見舞われ、つないでいた手は断たれて間もなくばらばらになったそうです。長男は近くの電柱につかまっていたところを隣の人に助けられ、母は屋根にかけ上がり潮の引くのを待っていました。しかし、長女はどこへ行っただか分かりません。

途方に暮れて重い足を引きずり家に帰り、家財道具を動かしていると、土間の箱の下に長女の哀れな悲しい姿がありました。思わず抱き上げましたが、もう冷たくなっていました。「皆いっしょに出かけたら、こんなことにならなかったのに」と、ただ止めどなく涙があふれてきました。

明治二十三年（一八九〇）、四万十川中流の四万十町窪川で起こった出来事です。  
 二、三日前から降り続いた雨は、しだいに激しくなり篠つく豪雨となりました。特に四万十川上流の東津野、梶原郷は水量がものすごく、谷川は増水して氾濫し濁流は山肌をめぐり、山々の山腹から水が突き出て、山崩れが起きました。

水は谷あいや平地の家々に溢れ、近辺の田畑もみるみる水没しました。上流から根こそぎの流木が押し寄せ、牛馬が流され、遂には住家まで、ものすごい勢いで川下に流される有様でした。

しかし、夕方になると四万十川の水は急に引き始め、さらには急に止まるほどとなり、やがて西の方から陽が差し出したのです。川の水はどろ濁りでしたが、普段と少し違う程度でようやく落ち着きを取り戻していました。松葉川や西川角などでは近所の人々が道端に集まり、すさまじかった水の出方を話すなどの光景も見受けられました。

ところが、それから一、二時間たったと思われた時刻に、にわかに大音響が起きました。すさまじい山鳴りがとどろき、大激流が田畑、家屋を押し流し、その大濁流の中を人々は無我夢中で家の裏山や丘へ逃げまどい避難しました。比較的平地にある流域の集落はほとんど水没し、牛馬が流され、不意をつかれた人たちは数多くの死傷者を出しました。家もろとも家人もそのまま流され、家の草葺きの屋根の上にしがみつながら助けを求めているという悲惨な状況でした。

上流の東津野村で山崩れが起こり、土砂が川の水をせき止めていましたが、貯まった水の量に耐えきれなくなり、土砂が崩壊して一気に下流に流れて、大被害をもたらしたのです。



## 背景

明治23年（1890）9月11日に四国地方を横断した台風は、四万十川流域に大雨をもたらしました。豪雨は流域の各地に洪水被害を招きましたが、急に水位が下がり、天候も回復してきました。人々が安心した時、大音響とともに四万十川沿いに激流が押し寄せ、大被害が発生しました。後になって分かったのですが、四万十川上流の東津野村で山崩れが起き、土砂が川の水をせき止めていましたが、貯まった水の量に耐えきれなくなり、せき止めていた土砂が崩壊して一気に下流に流れて、大被害をもたらしたということです。

## アクセス

### 明治23年水害碑

- JR窪川駅より北西へ直線距離約2km
- 四万十町仕出原 高岡神社境内
- 緯度経度 北緯33度13分14秒、東経133度07分28秒



黒潮町の加持川の堰は、川の水が増えるたびに切れていました。そこで村人は人柱を立てることにしました。昔は堰が決壊するのは祟りのためで、人柱を立てて祈禱することにより堰が守られると考えられていたのです。村人は縦縞に横縞の継ぎ当てをした着物を着て通る人を人柱にすることに決め、あちらこちらの道の辻などへ立ち、縞の着物を着た人が通るのを待ちました。

毎日毎日捜しましたが、どうしても遭うことができませんでした。ところが三、四日たったある日の夕方、年配の遍路さんが足早に通りすぎようとしてきました。着物は縦縞でした。この人も横縞の継ぎなど当ててはいるはずがない、と思いながら通りすぎようとする遍路さんを見ると、なんと横縞の継ぎあてをしているではありませんか。

村人は、その遍路さんの足を止め、事のいきさつを話し、人柱になっていたことを祈る気持ちで懇願しました。遍路さんは天に向かって祈り始め、しばらく祈ってから急に口を開き、「私は天涯孤独です。この世に生きるだけ生きて来ました。もう残りわずかですから、大勢の皆さんのお役に立てることがあります。喜んでお引き受けしましょう」と言いました。村人はよろこび、その遍路さんを迎え入れ、丁重におもてなしをしようとするとともに、その夜は涙ながらに別れを惜しんで夜を明かしました。

翌日、村人は堰のそばに大きな穴を掘り、遍路さんを入れました。穴からは節を抜いた大きな竹の筒が地上に出ていましたので、竹筒の底からは「南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏」と読経が聞こえ、それに唱和して地上でも「南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏」と竹筒の音が聞こえなくなるまで、三日三晩祈り続けました。こうして堰はできあがり、人柱の霊力により怨霊の怒りは鎮まり、大洪水でも絶対に堰が切れることがなく、大早魃でも不思議に堰の水が涸れることがなくなりました。それ以来誰言うともなく、この堰を「念仏堰」と呼ぶようになりました。



背景

昔、高知県黒潮町の加持川の堰は、川の水が増えるたびに切れていました。村の人々は堰が決壊するのは祟りのためで、人柱を立てて祈禱することにより堰が守られると考えました。しかし、誰を人柱にするのかとなると、みな口をつぐんでしまいました。その中で、ある村人が、昨夜見た夢の中で、神様から「遠からずこの辺りを、縦縞の着物を着て、それに横縞の継ぎを当てた人が通る。その者に人柱として立つことを頼むが良い」とのお告げがあったことを話しました。村人はこの話に賛同し、縞の着物を着た人を待つことにしたのです。

アクセス 念仏堰 (加持川)

- 土佐くろしお鉄道土佐入野駅より北へ直線距離約2km
- 黒潮町加持
- 緯度経度 北緯33度02分37秒, 東経133度00分40秒



江戸





▲昭和10年洪水の浸水状況  
(四万十市百笑)



昭和10年洪水の浸水状況▶  
(四万十市中村)

## 背景

昭和10年(1935)8月27日、台風による降雨が強まり、<sup>わた</sup>渡川(四万十川)と<sup>うしろ</sup>後川が甚だしく増水しました。具同では28日午前7時に3.70mの水位が、翌29日には最高12.07mに達しました。27日の夕方、後川堤防が破堤し中村のまちは全町水に没し、大海のようになりました。また、破堤したのが夕方満水が夜中であり、死にもものぐるいの<sup>あび</sup>阿鼻<sup>きょう</sup>叫喚<sup>かん</sup>の中での避難にもかかわらず、一人の死者も出なかったことは全くの驚異であると伝えられています。

## アクセス 一条神社

- 土佐くろしお鉄道中村駅より北西へ直線距離約1.5km
- 四万十市中村本町
- 緯度経度 北緯32度59分27秒, 東経132度55分03秒



「全没した中村の町は、阿鼻叫喚のちまたと化した」と昭和十一年(一九三六)幡多郡東山村(現在の四万十市安並付近)の助役は語っています。

「いよいよ大時化となつたぞ」<sup>わた</sup>渡川と<sup>うしろ</sup>後川の増水がはなはだしいので、老人たちが「明治二十三年(一八九〇)ほどの洪水になるぞ」と言いだした。水位はますます高くなる。拙宅(安並にあつた自宅)の下の民家の荷上げの手伝い、豪雨の中の作業はみんな懸命であつた。人は皆高い家に避難した。夕方になってその家も全部流れてしまった。このとき初めて家の流れるさまを見た。屋根の丸瓦が沈むまでは流れないが、屋根の瓦が見えなくなると浮いて流れる、無惨な光景であつた。(中略)

それまでに二七日の夕方、急に後川右岸が破堤して、中村町(現在の四万十市中村付近)に洪水が流れる椿事が起つた。町の警察、消防団、幡多支庁、町役場は驚いて、警察は半鐘をならして緊急避難を伝えた。驚いた町民は夕方の雨中、奔流の中を古城山、一条神社、天神さま、土生山へ我先と避難。(中略)町の人達も明日は大水で堤防が切れるという警報に、死にもものぐるいであつたという。その晩公園山(古城山)その他では、野宿、町内全域停電で、真暗闇の中を懐中電灯をたよりに各自助け合いつつ避難した。夜中の懐中電灯の光とざわめきと叫びは夜の明けけるまで公園山に続いた。阿鼻叫喚とはこのことか、後川を隔てた私の家には台風の中ときれときれに聞こえた。今でも私の耳の中には、その声が聞こえてくるようである。



昭和二十一年（一九四六）当時、女学生だった人の記録に基づく話です。

ふと目が覚めました。置時計を見ると、四時でした。「まだ早いな」と思いながら、またうとうとし始めました。ガタガタと障子のゆらぐ音がして、少し揺れました。「地震だ」と直感したとき、ふすま越しに兄が「起きているか」と言っ、庭に面したガラス戸を開け、外に出た気配がしました。少し心細くなって、私もついて外に出ました。寒かったので、思わず一枚の布団をかぶって出ました。

兄の傍まで行った時、突然大きな地の底からのような鳴動がして、大揺れが来しました。揺れはだんだんひどくなり、兄と抱き合ったまま地面に投げ出されました。足をすくわれ転がされたような感じでした。畑の中へころがりこみ、二人で頭から布団をかぶりしました。この世の終わりかとはばかり思われて生きた心地がしませんでした。

気がつく、辺りはまた元の静けさに戻っていました。「あつ」と思わず声をあげました。私たちを呼ぶ母の声に駆け寄り、三人で一枚の布団にくるまりました。

「これで火事さえなかったら」と言っている近所の人に、あいづちを打っていた時、突然近くから火事が起こりました。火はみるみる広がりました。親を呼ぶ子、子を探す親、火の回りが早いため救出できず生きながら火にまかれ焼け死んだ人など、本当にこの世の地獄でした。

母をかばいながら、安全な場所に避難しました。ようやく明けかけた町の姿は、昨日までとは全く違い無残な光景でした。

## 背景

昭和21年（1946）12月21日午前4時過ぎ、大地震が地盤の軟弱な中村のまちを襲いました。当時の全町2千余の家屋のほとんどを全半壊させ、夜明けまでに町は廃墟となりました。間もなく町中から燃え上がった火の手が拡大し、町並みを焼き払いました。渡川鉄橋も両端を残して墜落して、中村の町は壊滅に近い状態になりました。この話は、当時、女学生だった人の記録に基づくものです。

## アクセス

### 南海地震碑

- 土佐くろしお鉄道中村駅より北西へ直線距離約3km
- 四万十市中村 為松公園内
- 緯度経度 北緯32度59分49秒、東経132度55分47秒





今から一〇〇年以上前の明治二三年（一八九〇）、四万十川沿いでの出来事です。  
 大暴風雨によって四万十川が大洪水になる恐れが出てきたため、屋敷の低い家屋は高台に家財道具や牛馬を避難させて、万一の大洪水に備えました。我が家では二階に上げていた米俵を、屋根を抜いて上の畑地に引き上げました。  
 米俵をあげてホツとするとき、つないでいた子馬が道からすべって、川に転落してしまいました。これを見た女たちは声を揃えて、「おろよ、おろよ」（おろとは馬のこと）と必死の声を振り絞って呼びましたが、子馬は泳いで家に帰ろうとして、そのうち流れに流され出しました。  
 水泳達者な祖父も泳いで助けに行くことができず、人々は「おろよ、おろよ」と呼ぶほかはありませんでした。幸いにも子馬は親馬のいななきによって、頭の向きを変えて泳いで帰ってきました。  
 動物とは言え、あの大洪水に親馬のいななきによって、流されずに親の元に帰ってきた親子の絆は、この時の人々の感情に刻み込まれました。子馬が上がってくると、親馬は長い舌でなめまわし、子馬は救われたと喜んでいきます。大暴風雨、大洪水の中での感動的な出来事でした。



## 背景

明治23年(1890)は初夏から天気が順調で、作物は近年にない豊作でした。ところが、9月9日午後から降り始めた雨は10日にはやや激しくなり、さらに11日には豪雨となり、四万十川と後川の水量は増加しました。このため、中村のまちは、低地はもちろん、上町や本町辺りでも瞬く間に浸水しました。この洪水は昭和4年(1929)に着工される渡川(現在の四万十川)改修工事の計画の規模を決める洪水となりました。この話は、母馬のいななきによって子馬が救われた親馬子馬の話です。

## アクセス うしろ 後川

- 土佐くろしお鉄道中村駅より北北西へ直線距離約2km
- 四万十市安並
- 緯度経度 北緯33度00分00秒, 東経132度56分07秒





▲南海地震で落橋した渡川鉄橋 (提供: 四万十市)

背景

昭和21年 (1946) 12月21日午前4時過ぎ、突如襲った大地震とその後の火災は、中村のまちに壊滅的な被害をもたらしました。旧中村市の被害状況は、死者・行方不明者291人、負傷者1,065人、家屋の全壊1,919戸、半壊1,372戸、焼失163戸に及びました。人々は、中村の町は再起不能かと思うほどだったと言われています。

アクセス 赤鉄橋 (四万十川)

- 土佐くろしお鉄道中村駅より西北西へ直線距離約2km
- 四万十市中村
- 緯度経度 北緯32度59分24秒, 東経132度55分40秒



昭和南海地震は、中村一万町民の暁の夢を破り、恐怖のどん底につき落としました。また、揺れる暗黒の家からようやく戸外に逃れ出た人々を霜の上にコロコロと転がし、怒濤のような物凄い音をたてて、全町二千余の家屋をほとんど全半壊させました。もうもうとたちこめた土煙は救いを求める悲痛の叫びを呑み込み、一瞬のうちに町を修羅の巷とさせ、夜明けまでには完全に町を廃墟にしてしまいました。

まだ明けやらぬ地震直後、あちこちで人家が火を発して人々を狼狽させましたが、いずれも周囲に空き地があつて他への類焼を免れ鎮火しました。しかし、間もなく町中から燃え上がった火の手はみるみるうちに家々に燃え移り、猛火となって凄惨な光景を呈し、計六十余戸を焼き払ってようやく鎮火しました。

白日のもとに見る中村市街地は何と悲惨な光景だったことでしょうか。焼け跡からはもうもうと煙が上がリ、町中のほとんどの家屋が全壊、半壊の状態でした。国民学校なども無惨に倒壊し、渡川鉄橋 (通称赤鉄橋) もトラス部分八径間のうち、両端を残して六径間が落橋していました。

中村は再起不能かというのが人々の実感でした。



今から三〇〇年以上も前のことです。中筋川沿いの国見村（現在の四万十市国見付近）は元禄一三年（一七〇〇）、一四年（一七〇一）、一五年（一七〇二）と連続の大洪水で、村人は山を売り、田を売り、屋敷を売って、草の根まで食べて命をつないでいる状態でした。明けて宝永元年（一七〇四）、今年こそはと思っ

ていると、七月に三度の洪水に遭い、絶望のどん底におちいりました。しかし、こんな年でも役人による検見は受けなければなりません。

宗兵衛は老役の弥助と相談して、検見役に凶作地ばかりを見せて、年貢を少しでも少なくしてもらうことを計画しました。検見役が来た時、二人は「国見の七まがり」という道の谷にある劣等地を見せたり、上作地の「森の松」と劣等地の「沖の松」を取り替えて、減免を願ったりしました。それは村人のための苦肉の策で、誰一人として密告する者はいないと思われましたが、その時、東の丘の上から「宗兵衛、弥助は森の松と称して検見方をだます者」と叫ぶ者がいました。役人は感づいて二人に詰問しました。

二人は、永年の凶作に村の困窮は極限に達していると述べ、特別のご慈悲を願いましたが、聞き入れられず、役人は二人を捕らえようとなりました。弥助は逃げることはできましたが、宗兵衛は捕らえられ、高知に護送され、宝永二年（一七〇五）二月二日斬罪に処せられました。

しかし、宗兵衛の死は、検見方を反省させることになりました。宗兵衛の訴えが聞き入れられ、国見の土地は捨地として明治九年（一八七六）の地租改正まで減免され、村人の生活に偉大な功績を残しました。村人は宗兵衛の徳を慕い、社殿を建ててその霊を祀りました。これが若宮神社（現在は天満宮に合祀）です。



▲中筋川と国見地区を望む

## 背景

義民とは、一身を犠牲にして世のため人のために尽くした人のことです。中筋川流域では、昔から水害が多発して、農民は困窮していました。国見村の庄屋だった中平宗兵衛は村人に対して耕作に精を出すよう励ますとともに、藩に対しては田畑が浸水した時には捨地として年貢を納めなくてもいいように働きかけていました。三年連続の大洪水で村人が困窮している年に、またもや洪水が起きました。この年の検見（役人が来てその年の作柄から税金を決めること）に際して、宗兵衛は村人のためを思い、検見役に凶作地ばかりを見せて、年貢を少しでも減免してもらうように計りました。

## アクセス 天満宮

- 土佐くろしお鉄道国見駅より西へ直線距離約1km
- 四万十市国見
- 緯度経度 北緯32度58分49秒、東経132度52分48秒





▲老人を背負って避難

## 背景

この話は、犠牲者ゼロ水害の住民行動の様子を体験談に基づいて描いたものです。平成13年(2001)9月5日夜から秋雨前線が停滞し、翌6日未明にかけて高知県西南部では集中豪雨が発生しました。降水量は、大月町で総雨量577mm、24時間雨量520mm、時間最大雨量110mmを観測するなど、記録的な大雨となりました。この水害は「寝耳に水」の危険な災害にもかかわらず、死者・行方不明の出なかった特徴的な水害でした。土佐清水市下川口浦の区長の行動から、一人の犠牲者も出ることがなかった要因をうかがい知ることができます。

## アクセス 平成13年水害の碑(宗呂川)

- 土佐清水市役所より西へ直線距離約12km
- 土佐清水市下川口橋南詰
- 緯度経度 北緯32度47分00秒、東経132度50分28秒



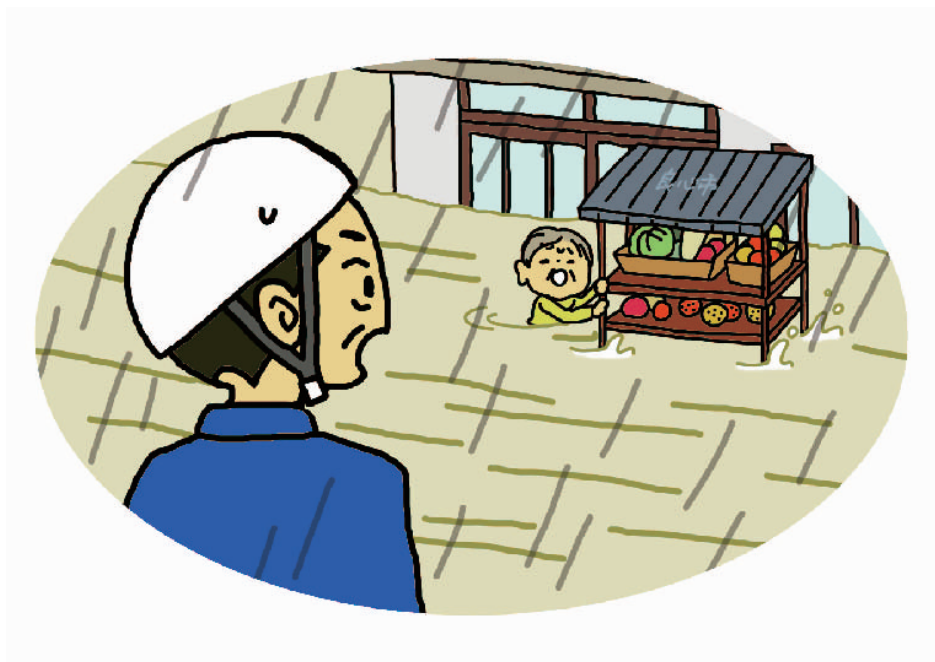
平成一三年(二〇〇一)の高知西南部豪雨を体験した土佐清水市下川口浦の区長の体験談です。私は下町に住む友人から浸水の知らせを受け、すぐに区長場に入り、マイク放送で下町と中町に避難命令を出しました。それは、九月六日午前四時過ぎだったと思います。

各戸に避難を大声で呼びかけながら、河口にある水門を閉めるため消防団員三名と向かいました。水門にたどり着きましたが、水門を閉めるのを諦めました。集落内の各溝を通じて大量の水が川に流れ出していたからです。地区内住民の安全確保のため、消防団員と連携しながら、全戸を歩いて避難を呼びかけました。

その時、下町と中町では床下浸水、床上浸水までの家も多くあり、住民は次々と避難所に集まって来りました。消防団員は二、三人でチームを組んで住民の安否確認のために巡視していました。独居老人宅を訪ね、一人、二人と救助しました。懐中電灯を手に、しのつく雨と稲光りの中での声かけでした。

明け方になって下川口橋に流木や家具、布団、畳等がかかり、川の流れを完全にせき止める形となり、その水が集落内に流れこんできました。下・中・上の各町筋が川となり、見る見る内に民家の一階部分まで水没し、堤防は決壊し、船だまりの小舟は流され、車は目の前を何台も浮かんで消えていきました。

住民の安否の確認のため、明るくなった地区内を首まで水につかりながら、全戸に声かけをしました。道路の中央部分歩き、流れて来た三、四メートルもの竹を手にして、玄関や窓などをノックして回りました。



## 背景

平成13年（2001）9月5日夜から秋雨前線が停滞し、翌6日未明にかけて高知県西南部では集中豪雨が発生しました。土佐清水市の宗呂川の水位は急激に上昇し、川沿いの県道もまるで川のような状態になりました。この話は、川のようになった県道の向こう側にいるおばあちゃんを救出した駐在さんの話です。駐在さんとおばあちゃんの無言の会話に、お互いを思いやる気持ちが表現されています。

## アクセス 下川口駐在所前

- 土佐清水市役所より西へ直線距離約12km
- 土佐清水市下川口
- 緯度経度 北緯32度47分05秒，東経132度50分28秒



平成十三年（二〇〇一）の高知西南部豪雨を体験した駐在さんの話です。  
私はパトカーを高くした所に移動させ、すぐに駐在に戻りました。すると、外線電話が鳴り出しました。電話に出ると「前のおばあちゃんを見に行ってください」と叫ぶような声が聞こえてきました。  
私はすぐに駐在の向かい側に住む八四歳のあのおばあちゃんのことだと思いました。このおばあちゃんは心臓を患った<sup>わすら</sup>独居老人で、いつも私に声をかけてくれるきさくな人です。この時、既に駐在所内の水深は一メートル位になっており、私は腰まで水に浸かりながら外に出て、おばあちゃんの家の方を見ました。するとおばあちゃんは自力で家から出てきたのか、家の前にある良心市（無人販売所）の棚につかまり、私の方を向いて必死に助けを求めて叫んでいました。  
おばあちゃんの声は、雨と雷と付近の人の叫び声に<sup>かき</sup>隠れ、私の耳に届くことはありませんでしたが、「駐在さん、駐在さん」と言っているように思えました。私はその姿を見た瞬間、無我夢中でおばあちゃんに向かって走り出していました。走り出すと言っても、駐在前の道路は既に私の胸の高さまで水が増えていますので、少しずつしか前に進みませんでした。  
何とかおばあちゃんの元に<sup>た</sup>辿り着き、おばあちゃんを右脇に抱え、胸の高さまで増水して濁流のようになった道を泳ぐようにして駐在へ向けて進みました。既に道路に足のつかないおばあちゃんは、私の負担をどうにかして軽くしようと、八四歳の体力を振り絞って足を動かし、言葉にならない声で私に何か言っていました。その声は聞き取れませんが、おばあちゃん目を見れば、何を言わんとしているのかが分かりました。必死の思いでおばあちゃんを駐在の近くの支所に避難させ、急いで駐在に戻りました。



宝永南海地震の津波高を表示している大島小学校

## 背景

嘉永7年(1854)11月5日の大地震は、この年が甲寅きのえとらの年であるため「寅の大変」と言われ、また11月27日に改元されて安政元年となったため「安政の南海地震」とも言われます。この地震については、宿毛市の浜田家に「甲寅大地震御手許日記」という記録があり、当時の地震とその後の様子をうかがい知ることができます。なお、嘉永7年の地震では、津波は大島のはいたか神社の石段7段まで上がったことが記されています。さらに宝永4年(1707)地震の津波はそれ以上に大きく、石段42段の高さにまで達したことが記録されています。

## アクセス はいたか 鵜神社

- 土佐くろしお鉄道宿毛駅より南西へ直線距離約2km
- 宿毛市大島
- 緯度経度 北緯32度54分57秒, 東経132度42分13秒



嘉永七年(一八五四)十一月五日、空はよく晴れ、寒気も厳しい朝でしたが、昼からは暖かく、よい天気でした。夕日が片島の上に落ちようとした時に、突然大地震が起こりました。

この後、日没までに二回、夜中に七、八回も地震があり、宿毛の町の家は、大半つぶれ、その上に火災が発生して、大変な騒動さわごうとなっていました。家が潰れる度に土煙があがり、人々は火事だと騒ぎました。しかし、津波が来るといつて皆が騒ぎ出したので、火を消そうとする者もなく、宝物一つ取り出す者もなく、皆が一目散に山上へ逃げ上がりました。

そのうちに、大きな潮音とともに津波が押し寄せ、八反(約九〇メートル)の大堤を通り越え、一丈(約三メートル)程も水田の中に潮が入り、日の入り頃までに宿毛の町の中にまで潮が来ました。この津波の騒ぎで、人々は山上に逃げており、出火をしても消すものもいなかったため、火勢はいよいよ盛んになり、本町、真丁、牛の瀬、沖須賀、仲須賀の大半は焼けてしまいました。

大島は四日の朝、小地震(注:安政東海地震が一月四日に起きている。)で潮が差したので、注意していたため怪我人はありませんでしたが、津波ははいたか神社の石段七段まで上がり、洞泉寺の障子端まで来ました。潰れた家は極めて多く、流れた家は一三、四軒でした。

六日も何回か小地震があり、津波も来ましたが、町の入り口までで大したことはありませんでした。

七日の昼過ぎ、かなり大きな地震があり、小地震は何回もありました。人々は和守神社みこもりの付近に仮小屋を建てて夜を過ごし、殿様は人々に炊き出しを行いました。夜中にも何回かの小地震があり、津波も来たので、人々は安心して眠ることができませんでした。



江戸



## 背景

宿毛のまちを守るために、野中兼山のなかけんざんは万治元年（1658）に松田川右岸に「総曲輪」と呼ばれる堤防を築きました。それと同時に、松田川左岸側の堤防を低くし、いざという時には左岸側に水が流れるようにして、宿毛のまちを守っていました。封建時代には左右岸の堤防の高さに違いを設けることにより、重要度の高い地域を守るための対策がとられていたのです。

## アクセス 河戸堰（松田川）

- 土佐くろしお鉄道宿毛駅より北東へ直線距離約2 km
- 宿毛市中央
- 緯度経度 北緯32度56分23秒，東経132度43分51秒



この話は、高知県で「土木神の化身」と呼ばれるほど堤防や堰、新田開発、港湾などの土木工事を行った野中兼山が宿毛のまちを洪水から守る堤防（総曲輪）を様々な工夫をして築いた話です。

総曲輪は、河戸堰から下流の松田川右岸を取り巻く堤防で、延長二、八〇〇メートル、幅員六〜一〇メートル、高さ四〜六メートルの大規模なものです。野中兼山の命により、幡多郡七万石の全地域から人夫を集め、宿毛の侍たちがその監督に当たって工事を行ったものです。

それまで宿毛を流れていた支流をせき止め、川幅を広げて一本の川にまとめるための工事は並大抵の苦勞ではなかったに違いありません。伝承によると、兼山はどんなに寒い日でも仕事を休まず、「荒瀬の川が凍ったら休ませてやる」と言い、人夫たちは「雪や降雪降り、あられも降雪降り、荒瀬の川が凍るまで」という絶望的な詩を口ずさみながら工事を続けたと伝えられています。

兼山は、宿毛側の護岸に水勢をはねかえす「はね」を設け、水勢を対岸の和田や坂ノ下に向けるように工夫をしていました。また、宿毛対岸の古川口に水越堤防を設け、和田・坂ノ下の堤防を、宿毛より二〜三メートル低くして、洪水が氾濫した時は、先にこの堤防を越えさせ、和田、坂ノ下を水没させて水位を下げ、宿毛の安全をはかるようにしていました。このため、この工事以後、和田、坂ノ下両村の水害が絶えることがありませんでした。

藩政時代には領主の居る宿毛に抗議することは許されませんでした。和田の人々は高い台地に家を立てて、住家を水害から免れるように工夫していましたが、水田は年々被害を受けていました。このため、和田の人々の中に兼山の悪口を言う人がいるとも言われています。